

平成 21 年度第 1 回 サイバー・キャンパス・コンソーシアム
教育学グループ運営委員会 議事概要

- I. 日時：平成 21 年 6 月 26 日(金) 午前 10 時 30 分から午後 0 時 30 分まで
- II. 場所：私立大学情報教育協会事務局会議室
- III. 出席者：難波（司会）、三尾、竹熊（TV 会議参加：議事録係）
井端事務局長、森下、恩田
- IV. 検討事項

議題

1. 事務局より

- ・本日の配布資料の確認がされた。

2. 協議：学士力の詳細設計について

- (1) 共通の到着目標をイメージしたコア・カリキュラム、到達目標、測定手段の検討について
 - ・各委員から以下の報告があった。

- ① 総合大学教育学部において示された教育学全体の学士力（アドミッションポリシー）について
- ② 具体的な到達目標や測定方法について大学院生に行ったアンケート結果について。
- ③ 根本は哲学（＝人間学）という視点からのコア・イメージの考察について。

以上を踏まえ今回は、難波委員が出されたコア・カリキュラムについての詳細設計をするまえに、まずは、教育学領域の到達目標を具体化する方向で検討することになった。

- (2) アウトプットのイメージについての確認

具体案を出し合う前に、その方向性について以下のような意見が出された。

- ・1 年～4 年まで全体にわたるカリキュラムを提示するのか、あるいは、4 つの目標毎の到達目標等を示すのか。
- ・「学士力の実現に向けて努力しましょう」と呼びかけた場合、多くの先生がそれに向けて事業を展開できるのか。授業の枠組みの中で到達し得ないのではないか。どのようにして学士力として質保証するのかを含め、抽象的な内容を因数分解し、具体的に確認していただきたい。言い換えれば、「～ができる」という場合にどこまでできるべきなのか、その深さ、水準を設定して欲しい。
- ・教員の教育力のイメージも含めるのか。
- ・教育学も教育学を主専攻とする場合、教職課程として履修する場合など様々であるので、どの方向からいくのかを決めなければ具体案が思い浮かべにくい。
- ・教職課程は除外して、教育学部の 4 年間に絞っておこなう方が良いのではないか。

これらの意見を踏まえ、方向性としては、「私立大学における教育学関係の「学士力」について」を目標として、目標 1～4 それぞれについての具体案を具体的に見ていくことになった。

- (3) 到達目標の詳細設計

1 (学びの意義と教育の必要性を論理的、分析的に理解できる。) について

委員より、大学院生を対象とするアンケート結果より取り上げるべき意見について以下のような説明があった。

・教育学原論、教育史、教育哲学なども関係するだろう。院生 B のように「学ぶ」ということについて具体的に説明できることが必要だろう。①が 1 年生、②が 2 年生と学年段階を追っているようにもみえる。測定方法はやはり論述形式が妥当である。また、院生 E の回答はコンパクトにまとめられていると思われる。

< 参照 >

■院生 B ■

【到達目標】・「学ぶ」ということについて、以下の段階で論理的に説明することができる。

- ①自らの体験（教育体験、教育を受けた体験の両方）から「学ぶ」ことの自分なりの意義を具体的に説明する。
- ②①で行われた「学び」に関して学問的な裏付けを教育学（教科教育でも企業教育などでも良い）などの先行研究から分析的に説明する。
- ③自らが所属する（もしくは今後所属する予定の）集団にとっての意義のある「学び」というのはどういったものかが論理的に説明することができる。（企業、学校など個人個人によってそれぞれの集団があるはず）

【測定方法】・上記の①～③の各段階をそれぞれ論述させ、①はその具体性、②は学問的裏付けの論理性、③は自分が所属する予定の集団の特性を具体的に踏まえた上で、その論理性で測定する。

■院生 E ■

【到達目標】・自らの教育に対する意識や目標を論理的に示し、それに対する方法や対策を具体的、分析的に示すことができる。

【測定方法】・対象者は自分が教育の中で達成したい目標を掲げ、それに対する意義や現代的課題などを論理的に分析、記述を行う。それを基に対象者の学士力を評価する。

今回は、これらの意見を踏まえて、文面も含め、さらに具体的に検討することとなった。

2（意欲と能力に応じた学びに配慮した教育をデザイン（設計、実施、評価、改善）できる。）に

ついて

アンケートでは、教職課程を意識し、指導案の作成に焦点を絞った意見が多く、これは、というものがなかったが、院生 B と院生 E の意見が良いように思った。特に教職課程に限らないものとしては、院生 B の到達目標がよいように思う。

<参照>

■院生 B ■

【到達目標】

- ・自らが所属する（もしくは今後所属する予定の）集団の実態を把握することができる
- ・そうした実態の学習集団に関して、どのような学習をデザインすべきか、論理的に説明できる。
- ・実際にその学習を実践し、他者との意見交換を通して自らの実践を反省することができる。

【測定方法】・集団の実態が良く調べられているか、論述形式で測定する。

- ・学習デザインは指導案の作成、実践、意見交換、反省は学習記録を元に評価する。

■院生 E ■

【到達目標】・意欲や能力を高めることのできる授業、あるいは教育活動を計画し、実践、評価することができる。また、実践記録を基に自ら改善点を見直すことができる。

【測定方法】・対象者は実際に授業や教育活動をデザイン、実践、評価し、それを振り返り改善を図る。そのデザインの意義や具体性などを基に評価を行う。

これらの意見を含めて検討を行った。

3（教育が直面する課題や問題に自らが積極的に関心を持つことができる。）について

3についても院生 B の意見がよい。特に「ディスカッションを通じて」という点が注目に値する。院生 G は教職課程としては良い案である。院生 E の意見もコンパクトにまとめている。

<参照>

■院生 B ■

【到達目標】・現代の教育課題について理解し、その原因を分析し、ディスカッションを通して考えを深めたいうで自分なりの解決案を示すことができる。

【測定方法】・現代の教育課題についてその特徴や原因を理解できているかどうか、論述形式で測定する。また、ディスカッションで出た他者の考えを踏まえたうで自分なりの解決案を示せているかどうか、論述形式で測定する。

■院生 E ■

【到達目標】・現代の教育持つ課題や問題を取り上げ、具体的に対策や取り組み方を考えることがで

きる。

【測定方法】・対象者は現代教育の持つ課題や問題点を自ら取り上げ、具体的な課題や取り組み方をデザインする。その着眼点や論理性、具体性などをもとに評価する。

■院生G■

<到達目標>

- ・大学卒業時に教育が直面する課題や問題について、教育現場に入るときに困らない程度の知識を獲得できている。
- ・教育が直面する課題問題について、自分の意見を持ち、それを相手に伝えることができる。

<測定方法>

- ・学生に対して面接をする。（例えば、学力低下について動考えるか、クラスないでいじめが起きたときどう対処すべきか、学校で怪我をした生徒に対してどのような対処をすべきか、給食費を払ってもらえない家庭があるときにどのような対処を学校ですべきか、モンスターペアレンツに対してどう対処すべきかなどを聞く）
- ・今学生が一番興のある教育課題について調べレポートにまとめる。（実際にフィールドエワークしたことを書いたり、在学中に行った教育ボランティアや教育活動に関する実体験を書いたりするよりよいものになると思われる）

提案に対し、以下のような意見が出された。

- ・教育が抱えている課題についての現状認識がまずは必要ではないか。
- ・課題を整理できるという力が必要ではないか。自己の利益にとどまるのではなく、虚心坦懐に、自己を犠牲にして問題に立ち向かうことができるようなことを研修確認することが必要ではないか。個々は教育に関わるものとしてのフィロソフィーに関わる重要なポイントではないか。
- ・学校教育だけでなく、社会教育、家庭教育、地域など幅広い視点で人類としての教育の課題を捉えることが必要。単に時事問題ではない。
- ・流れとしては、ディスカッションが必要と中教審も述べているので院生Bの意見がよいと思う。

4（教育学を学んだ者としての責任と義務について、その重要性を自覚できる。）について

これは院生Gの提案が良いと考える。それ以外は教師としてという発想になってしまうが、そのなかから、敢えて選べば院生Hの意見がよいと思われる。なお、院生には、4年間の学士課程を振り返っての意見を出させている。

■院生G■

<到達目標>

- ・社会において教育学の果たす役割を述べることができる。
- ・学生自身が学んだ教育学を卒業後に役立てるプランを考案できる。

<測定方法>

- ・大学の講義や様々な活動を通してどのようなことが身についたかレポートにまとめる。（資格等もあればそれも含めて）
- ・卒業後の進路においてどのように大学で学んだことを活かしていくかレポートにまとめる。
- ・簡単な適正検査をする。

■院生H■

【具体的な到達目標】

- ・学びの意義や教育の必要性について、他者へ伝えることができる。
また、他者が教育について関心を抱くような考えを述べることができる。
- ・教育についての問題を社会全体の問題として考え、他者と共有することができる。
- ・教育のあらゆる事柄に対して、教育学を用いて考えようとするすることができる。

【具体的な測定方法】

- ・自分が教育学を通して学んだ重要性を発表する。
- ・教育問題を、教育学を学んだ者の立場か

以上、4つの項目について、より具体的な到達目標について大体の骨格が明らかになった。

(4) コア・カリキュラムに関連する具体的な科目名について

今後のスケジュールにも絡み、三尾先生より現在開設されている教育学に関する必修科目、選択

科目をお互いに出し合い、共通項を整理することが提案された。

それに関して、事務局長より一つ一つの科目名が必要というわけではないとの意見も出されたが、まずは具体的な科目を提示することによってより具体的にコア・カリキュラムのイメージがつかむことになった。

そこで、それぞれの項目に関して、例えばどのような科目が考えられるかを協議し、以下のような科目が提示された。

- 1 教育哲学、教育倫理、教育原論、教育原理、教育史、教育思想
- 2 教育心理学、教育方法学、教育工学、教育メディア学
- 3 教育社会学、教育行政学、比較・国際教育学、生涯教育、臨床教育学
- 4 教育法学、教育哲学

なお、教育と体育、法律（日本国憲法）などの関連科目も重要との意見も出された。

(5) 今後の活動について

7月30日（木）に早稲田で事前会合（13:30～）、その後（16:30～）私学協会にて会合を行うことになった（竹熊も参加する）。

事務局長より、これまでの教育学関係の先生方の意見、他の委員会の協議資料等も提示いただき、それらを参考にメールを含め、具体的に検討していくことになった。

3. 配布資料

- (1) 運営委員会次第
- (2) 前回会議議事録（平成21年3月19日開催）
- (3) メンバー表
- (4) 「宿題」の提出
 - ① 竹熊委員
 - ② 三尾委員
 - ③ 難波委員

<参考1> 日本経済新聞記事（2009年4月8日）

<参考2> 教育学グループ運営委員会の活動報告

- (5) 前回資料
 - ⑧-1 Education studies 2007
- (6) 化学教育における学士力の到達目標
- (7) 教職入門シラバス（難波先生提出分）
- (8) 分野別委員会の活動について
- (9) 教育学委員の意見表

以上